



風の音をききながら

2011年

3月6日

「かやっちのWeb site」<http://www.nava21.ne.jp/~hane2883/>

きょう生まれた人
 ■リムスキー=コルサコフ(1844/作曲家)

「唱歌」は祈りそのもの・・・

三善晃編曲「唱歌の四季」に寄せて

キリスト教会においては「歌うことは祈ること、祈ることは歌うこと」である。何もこれはキリスト教会に限ったことではなく、仏教におけるお経も非常に歌謡性が高く、ここでも「歌うことは祈ること、祈ることは歌うこと」である。まさにお経を「唱え」ているのである。私たちが歌を歌うとき、それがたとえどんな歌であったとしても、そこには「祈り」が包含されている。

唱歌は1910年（明治43年）の『尋常小学読本唱歌』から1944年（昭和19年）の『高等科音楽一』までの教科書に掲載された楽曲で、1910年代から尋常小学校で教えられた。この中には「春の小川」「故郷」「朧月夜」など今もなお人々によって歌われ、多くの世代に歌いつがれてきた。まさに祈りそのものである。

次の文は初めて全員で合わせ練習をしたときのブログ「涙ちよちよぎれて…笑われました(T_T)」である。

三善晃編曲「唱歌の四季」の初合わせ。限られた時間をいかにすてきなものにするか…その積み重ねだ。

唱歌というのは合唱でもよく歌われる。多くの作曲家がアレンジをしている。三善晃さんの編曲による「唱歌の四季」はそれらの中でもっともドラマチックでスケールが大きいといえる。今の20歳代から下の世代には唱歌の断絶があるとよく言われるが、ほぼどの世代にもよく知られ、共有されているとっていいのが唱歌だろう。音から浮かんでくる風景や音色自体のことを話したりしながら練習を進めて行った。

それにしても、三善晃さんの作品は音が多い。今回は混声合唱、二台のピアノによる編曲だからよけいだが、混声合唱も部分的に10声部に分かれたりする。いずれにしてもほんとうに色鮮やかだ。そして、何か美しい風景のドキュメント番組を見ているかのようにいろんな角度から唱歌を歌っていく…。

終曲の「夕焼小焼」で幼い頃の学校からの帰り道のことを思い出した。

ボクはいわゆる中山間地、里山の地域で生まれ育った。小さな谷間には小さな川が流れ、春には小鳥がさえずり、夏には蝉が鳴き、秋には木々が色づき、冬には氷が張り、たまに雪が積もる。自然の中で育った。雨が降れば、手の届きそうなところから雲が空へと立ち上っていく…。

もう既に過疎化が進んでいて、子どもたちの数は減り始めていた。同じ通学団からは同級生は3人いたけれど、年下の子どもたちはもういなかった。同級生は女の子で、3年生や4年生頃からは放課後サッカーやソフトボールを一生懸命やっていたボクはひとりぼっちでとぼとぼと里山を帰っていくことが多かった。

そう！今頃の季節、晩秋には里道は落ち葉でいっぱいになり、まるでふわふわのじゅうたんだった。冬の朝は少し早く家を出て、田んぼに張った氷を割って遊んだり、氷の上を滑って遊んで学校へ行った。

でも帰り道は寂しかった。一人で寂しかった。ボクには「お手々つないでみなかえろ」という友達がいなかった。だから、このフレーズは涙なしには歌えないんだってことが今日はっきりとわかった。そんな話をしたら、幼い頃に決して口に出していうことができなかった寂しさがこみ上げてきて、涙がチョチョぎれてしまった…。みんなに笑われた…。

歌だけではないのだろうが、こういったものにはそれぞれ原風景や原体験があって、そんなものに共感し合いながら何かが出てくるんだと思う。一人ひとりが出し合う必要なてあるまい。

しかし、自分の中にある原体験や原風景に向かい合い、一つひとつの音に重ね合わせていくということが、音楽を豊かに、そして、鮮やかに、聴く人の心に迫るものにしていくのではないだろうか。

決してセンチメンタルになってはいけない。技術的な裏付けを元に、確実に音として表現することが大切だと今日思っていた。

おてつないでみなかえろ…

幼い頃に見た真っ赤な夕陽を、演奏会会場でみなと一緒にきくと見ることができにちがいない…。

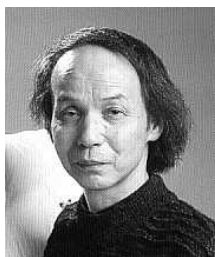
ブログ「風の音をききながら・・・」2010年11月14日「涙ちよちよぎれて…笑われました(T_T)」

シアターピースって!?

「シアターピース」とは、いわゆる舞台上の、限定された演奏行為ではなく、劇場全体を、多角的に使用した演奏スタイルをいう。同じ舞台上でも、「音源」が移動するやり方や、パフォーマンスを含む、動きが加わる演奏法。客席や通路、バックステージ、バルコニー席までを取り込んだ演奏空間。ときには、指揮者の指示とは無関係に、演奏者各自の、自発的な表現が尊ばれる。

日本でのこの分野の先駆者は、柴田南雄（1916～1996）である。彼の代表作「追分節考」（1973）は、まさに、この種の作品の第1号であり、海外でも紹介され、大きな反響を呼んだ。

この流れを受け、近年、千原英喜、信長貴富をはじめとする新進気鋭の作曲家たちが、このスタイルに着手している。



武満徹について

武満徹は不思議な作曲家だ。20世紀をリードし、それを代表する作曲家として、ノヴェンバーステップスやテクスチュアーズなど世の中に問う作品を多く作り出してきた。ばりばりの現代の作曲家だった。一方、好きな作曲家はポールマッカートニーであり、「ガーシュインのような作曲家になりたかった」と言い放ち、

井上陽水や小室等らとも親交を深め、こよなくポップス音楽を愛した。また、映画も大好きで多くの映画音楽も手がけてきた。前衛性ととんでもない緻密さとまっすぐな素朴さが共存した人といっていいただろう。

今回の「うた」だけでなく、以前指揮した武満徹の合唱における代表作「風の馬」でも感じたのだが、その緻密な音に頭の中はぐるぐる、くらくらするのだが、とんでもなく甘美で素朴な音楽は一度経験するとやめられない。ジャンルを超えて「音楽好き人間」武満の魅力が凝縮されている。やはり、不思議でとんでもなく魅力的な作曲家だ。

Topics 北の海鳥たち

「海鳥の詩」に登場する北の海鳥を紹介します。

◆オロロン鳥（ウミガラス）



その鳴き声から「オロロン鳥」と呼ばれている。



◆エトピリカ

エトピリカとはアイヌ語で「くちばし(etu)が美しい(pirka)」という意味で、鮮やかな飾り羽とくちばしの特徴の海鳥。

◆海鵜



鵜飼にはこの海鵜が使われる。

◆ケイマフリ

「ケイマフリ」という名称はアイヌ語名のケマフレ(kemahure「足が赤い」の意)に由来する。



◆ Information ◆



○三重県立上野高等学校第15回演奏会（4月30日【土】18時～伊賀市文化会館さまぎまホール）

※ここ数年毎年お招きいただき、ちょこっと出させていただきます。今年は新実徳英「聞こえる」を母校の後輩たちと演奏します。

○けいはんなフィルハーモニー管弦楽団演奏会

（6月5日【日】14時～京都府立けいはんなホールメインホール）

※以前共演したオーケストラから定期演奏会への客演でお招きいただきました。京都南部の学研都市けいはんなを拠点に活動するオーケストラです。喜歌劇メリー・ウィドウ、ドヴォルザーク交響曲第8番などすべてのプログラムを指揮します。

○上野合唱団ちょっとすてきなコンサート（9月25日【日】14時～青山ホール）

※今回は「リクエストコンサート」と銘打つてのコンサート。みなさんからのリクエストにお応えします。お楽しみに！

○合唱団Rinte第7回演奏会（2012年2月25日【日】14時～やまと郡山城ホール大ホール）

※R i n t e 初の大ホールでの主催演奏会です。プログラムも本日演奏する武満徹「うた」を始め、千原英喜「雨ニモマケズ」、デュリュフレ「グレゴリオ聖歌による4つのモテット」などを演奏します。